

氏名・(本籍地)	星野 壮 (東京都)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第109号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	在日ブラジル人とキリスト教についての研究
論文審査委員	主査 村上 興 匡 副査 弓 山 達 也 副査 山 田 政 信

星野 壮 氏 学位請求論文審査報告書

「在日ブラジル人とキリスト教についての研究」

論文の内容の要旨

〔目的〕本論文は、在日ブラジル人が関わる宗教集団・宗教運動について、日本で形成される「共同体」としての側面に注目し、これらの実態を明らかにするものである。そのため筆者は内外の諸理論を検討し、特に広田康生のトランスナショナルコミュニティ論を参照し、「越境者—共振者モデル」を提示している。これによって在日ブラジル人がカトリック信徒共同体やペンテコステ派教会共同体を形成していく中で、「エスニック・ネットワーク」を自ら「越境者」として単独ではなく、ホスト社会の協力者である「共振者」とともに構築していくものとして捉え、その「場所」、そして「ネットワークを下支えする要素」から分析していこうとしている。

〔対象と方法〕本論文で主に対象とされる在日ブラジル人の「共同体」は、愛知県下のカトリック教会における在日ブラジル人信徒共同体(豊橋・西三河)、プロテスタント教会(ブラジル系ペンテコステ派のM教会豊橋ブランチ)、岐阜県にある心霊主義センター、浜松市の日本人福音派L教会ポルトガル語部会である。同時にかかる「共同体」に先行する宗教伝統、ブラジル本国での動向、協働する日本人グループや行政の対応にも目配りがなされている。

筆者は本論文を作成するにあたって2009年から2014年8月までの調査データを使用している。その主な方法は先行研究・教団刊行物・行政資料などの文献調査、信徒に対する質問紙調査、インフォーマントへのインタビュー調査となっている。

【構成】本論文の構成は下記の通りである。

- 序章 問題の所在、研究の視角、研究方法について
- 第1章 日系ブラジル人から在日ブラジル人へ—その史的展開—
- 第2章 日本におけるカトリック教会と在日ブラジル人
- 第3章 カトリック教会における在日ブラジル人信徒共同体
- 第4章 日本で成長するエスニック・チャーチ群—ペンテコステ派と心霊主義—
- 第5章 不況時における教会資源の可能性
- 第6章 在日ブラジル人と教会の今後—オルタナティブの萌芽—
- 終章 結論
- 参考文献一覧
- あとがき

序章は〔目的〕〔対象と方法〕に加えて先行研究の概観が行われている。第1章では日本からブラジルへの日系移民の歴史、そして日本への「帰国」について概略が示されている。第2章では、在日ブラジル人がカトリック教会とどのような関係を持つのか、またカトリック中央協議会の外国人司牧・支援システムについて書かれている。第3章・4章は上記のカトリック教会、プロテスタント教会、心霊主義センターの分析となっている。これらの章が「共同体」の個別の記述や比較になっているのに対して、第5章・6章では、2008年のリーマン・ショック後の「共同体」が横断的に扱われている。すなわち第5章では、行政や非宗教的グループPの在日ブラジル人への関わりを引き合いに出しつつ、行政—市民活動—宗教団体モデルが検討されている。第6章では在日ブラジル人の本国への帰国が始まる中で日本に残った在日ブラジル人子弟の就学問題や日本人教会への転出が論じられている。終章では「越境者—共振者モデル」に基づいて、議論の総括が試みられている。

審査結果の要旨

本論文は在日ブラジル人のカトリック教会、プロテスタント教会、心霊主義センター、家族、個人、それと連携する諸団体に対して、筆者がポルトガル語学習からはじめ、文献、質問紙、インタビューなど多角的なアプローチによってデータを収集し、これを上述の「越境者—共振者モデル」に即して分析した堅実な研究である。同時に本論文は、在日ブラジル人の宗教が産み出す「共同

体」について、キリスト教のみならずブラジルの宗教運動の中でも重要な心靈主義にも視野を広げて論じている。第2章～4章のカトリック教会は、在日ブラジル人の代表的な活動の一つでありながらも、これまで鳥瞰的な調査がなされてきたとはいえず、その意味で本論文の詳細な記述は在日ブラジル人の宗教研究に然るべき貢献を果たしたといえる。またリーマン・ショックや東日本大震災後の在日ブラジル人を取り巻く、ドラスティックに変貌する状況をも見据え、最新の情報を取り入れつつ作成されたことも評価されよう。

本論文の特徴の一つは在日ブラジル人の「共同体」の形成過程を「越境者—共振者モデル」で分析することにある。筆者の意図はエスニック・ネットワークの形成を、「越境者」たる在日ブラジル人単独によるものでなく、ホスト社会の協力者である「共振者」とともに構築するものとみなす点にあり、ここで重要なことはインタラクティブに変容する主体にみられる双方向性にあるといえる。しかしこの企図が十分に達成できているかというやや疑問が残る。本論文では越境者／共振者という明らかな二項対立を措定するがあまり、両者を固定的に捉えたきらいは否めない。二項対立を乗り越えて活動するアクターの存在や相互の関係性に関してより多くの紙幅を割き、深く考察する必要があった。

またこれと関連して、具体的な宗教集団・宗教運動を扱う各論部分（第2章～6章）において「越境者—共振者モデル」が一貫した視座になっているのか、あるいはもしなっているとすると発見は何であるのかについて明快さを欠いているといわざるをえない。特に第5章・6章は社会関係資本、信仰継承、私事化そのものの問題として論じた方が素材を捉えやすく、近年の宗教学界における議論への接続可能性や学的寄与がより大きくなったのではないだろうか。

さらに宗教学の文脈でいえば、本論文で対象となったカトリック教会、プロテスタント教会、心靈主義センターは、それぞれチャーチ、デノミネーション、セクトとしてとらえられ、こうした教団類型ごとの「越境者—共振者モデル」が定式化されることが望まれよう。また対象となった3つの「共同体」は規模も歴史性も異なり、こうした要素が越境者—共振者の相互作用にどう影響を与えるのかも知りたいところである。

しかしながらこれら「越境者—共振者モデル」に関わる諸課題は、本論文の価値を貶めるものではなく、筆者が蓄積したデータの精査・再検討によって容易に克服されるものである。日本において多文化共生が叫ばれて久しいが、これを宗教という文化的背景や価値観の源泉にまで踏み込んだ議論はそう多くない。その意味で本論文の公開は学界の枠を越えて待たれるものであると確信し、これを博士（文学）の学位授与に相応しいものと判定する。